

令和7年度 県立勝田特別支援学校 自己評価表

No. 1

目指す学校像	◆笑顔とあいさつにあふれた学校 ◆保護者・地域から信頼される学校 ◆地域の特別支援教育の発展に貢献できる学校		
昨年度の成果と課題	重点項目	重点目標	達成状況
児童生徒による授業評価 <成果> ・授業がよくわかる・大体わかる児童生徒90.6% <課題> ・学校研究を核とする教員の専門性や授業力の向上 キャリア教育 <成果> ・学校全体の方向性の整理 <課題> ・地域との協働活動の評価	1 未来への学び	①【学校研究テーマ】主体的な学びクエスト（探求）～授業のレベル上げにチャレンジ～ ②【訪問教育(茨城東病院)】算数・数学科授業の推進 ③【キャリア教育】小学部1年から高等部3年までのキャリア教育の推進と整理 ④【カリキュラムマネジメント】単元配列表の運用	A
	2 安心安全	⑤【安心から学びと自信へ】児童生徒による授業評価 アナログ(相談BOX)・デジタル(オンライン相談)両面の児童生徒支援 ⑥【保健・給食】安全な給食体制 ⑦【防犯・防災体制】不審者侵入防止の防犯体制 大地震を想定した避難訓練・引き渡し訓練	A
	3 交流及び共同学習	⑧【コミュニティ・スクール】地域との協働活動の評価の実施 ⑨【交流及び共同学習】「合理的配慮個人支援シート」を活用した居住地校交流 ⑩【地域ギャラリー】地域の方々との作品交流(校内・校外) ⑪【校内ペア学年】部を超えた交流	A
	4 総合支援	⑫【地域への支援体制】関係機関と連携した児童生徒の支援体制の充実 新事業の推進と準備 小学校・中学校・高等学校のニーズ把握 ⑬【校内支援】教育相談の理解推進(部会等での係による紹介)	A
	5 高い専門性	⑭【学校研究の取組】①外部講師による講演 ②教員同士の語り合い ③模擬授業 ④実践・振り返り・実感 ⑮【ICT活用】活用の日常化 ⑯【働き方改革】業務効率化の検討 ⑰【福祉事業所合同説明会】関係機関との連携強化	B
	6 教職員の行動指針	⑱教育公務員としての誇りと高い倫理観 ⑲笑顔とあいさつにあふれた学校づくり ⑳チームとしての支え合い学び合い	B

評価項目	具体的目標	具体的方策	重点目標との関連	評価	成果(○)、課題(●)及び次年度(学期)への改善策(◇)
学校経営 管理 教育計画	<ul style="list-style-type: none"> 児童生徒による授業評価「授業は楽しくわかりやすいですか？」 A(そう思う)・B(大体そう思う)の合計90%超 	<ul style="list-style-type: none"> 学校研究(テーマ:「主体的な学びクエスト(探求)～授業のレベル上げにチャレンジ～」)を核とした教員の専門性や授業力の向上 	1-①⑤⑭⑮⑯	A	<ul style="list-style-type: none"> ○児童生徒による授業評価(12月)結果「授業は楽しくわかりやすいですか？」 93.5%(187/200名)の児童生徒がA(そう思う)・B(大体そう思う) ●自己有用感・自己肯定感を実感できる授業づくり ◇学校研究の方向性と充実
	<ul style="list-style-type: none"> 大地震・不審者・原子力等の避難訓練年5回、保護者等への引き渡し訓練年1回 	<ul style="list-style-type: none"> 防災安全係を中心に計画立案して実施し、12月に学校防災連絡会議を開催して各避難訓練等について検証 	2-⑦	A	<ul style="list-style-type: none"> ○年6回の避難訓練(大地震、引き渡し訓練、不審者、原子力、火災)を全て(100%)実施 ○学校防災連絡会議(12月)での学校・行政・消防・保護者代表との情報交換と課題の共有 ●本校を避難所として開設できる条件に関する行政との意見交換 ◇災害により長時間児童生徒が学校に待機した場合の引き渡し訓練
教職員の 育成及び 指導・監督	<ul style="list-style-type: none"> 学校全体のキャリア教育の構築(いつ、何に取り組むのか) 	<ul style="list-style-type: none"> 本校が目指すキャリア教育とコミュニティ・スクールとの「見える化(図式化)」 	1-③ 3-⑧	A	<ul style="list-style-type: none"> ○キャリア教育とコミュニティ・スクールとを関連させた図を担当教員が作成して掲示「見える化(図式化)」 ○キャリア教育のキーワードを小:交流、中:仕事体験、高:地域貢献と定めることで、いつ、何に取り組むのかを明確化 ●キーワードの定着 ◇交流係と進路指導係連携による周知
	<ul style="list-style-type: none"> 校内研修をとおして全教員が授業づくりの楽しさを実感 	<ul style="list-style-type: none"> ①外部講師講演会「主体的な学びとは？」→②教員同士の語り合い「楽しかった授業を語り合おう」→③模擬授業→④実践、振り返り 	1-① 5-⑭		<ul style="list-style-type: none"> ○教員同士の語り合い・模擬授業等により、多くの教員が授業づくりの楽しさを実感 ●校内研修と計画訪問(県教育庁授業参観事業)の方向性の一致 ◇各部主事と研究研修部との連携

	<ul style="list-style-type: none"> 起案文書等への校長からの感想・感謝記入による人財育成 	<ul style="list-style-type: none"> 教員の自己有用感・自己肯定感を高める人財育成を目的に、起案文書等に校長からの感想や感謝等を記入 個々の教員に応じた文章内容に努める 	<p>1-① 2-⑤</p>		<ul style="list-style-type: none"> 起案文書等への感想・感謝は100%実施 ●感想・感謝の内容の向上 ◇一人一人の教員を大切な人財と考えることの継続
対外活動	<ul style="list-style-type: none"> コミュニティ・スクールと関連づけた地域協働活動10回以上 新聞社等マスメディアへの情報提供10回以上 	<ul style="list-style-type: none"> 学校運営協議会等における検討 地域との協働活動・職場体験等における児童生徒の意識や行動変化の評価 積極的な教育活動の情報提供、新聞社等の記者と良好な人間関係の構築 	<p>3-⑧ 3-⑧</p>	A	<ul style="list-style-type: none"> コミュニティ・スクールと関連づけた地域協働活動を20回実施 ●地域協働活動の質の向上 ◇仕事体験に加え、児童生徒の課題の一つであるコミュニケーション力向上も目指す 新聞社等マスメディアでの紹介3回（茨城新聞1回、ケーブルテレビJWAY1回、FMひたち1回） ●社会情勢に応じた資料提供 ◇記者との人間関係の構築
コンプライアンス確保	<ul style="list-style-type: none"> 年1回全教員が自分の言動を振り返る機会をつくる 若手教員（初任者・2年次・3年次）の退職者0名、教員不祥事0件 	<ul style="list-style-type: none"> 教頭が作成した「振り返りチェックリスト」を8月に実施 校長との定期的な面談を年2回（①7～8月、②12～1月）、日頃から校長・教頭からの積極的な声かけを行う 風通しのよい職場づくりを目指し、日常的に校長室のドアを開けておくことで情報がスピーディーに校長室に集まりやすくし、教員不祥事の未然防止につなげる 	<p>2-⑤ 6-⑱ 2-⑤ 6-⑱</p>	A	<ul style="list-style-type: none"> 全教員(100%)が「振り返りチェックシート」を8月に実施し、日々の言動を振り返る機会を設定 ●学校全体の雰囲気づくり ◇教員主体によるチームビルディング型の研修 若手教員(初任者・2年次・3年次)の退職者・療休者0名 教員不祥事0件 ●校長からの積極的な声かけ ◇校長室のドアオープンの継続

働き方改革	<ul style="list-style-type: none"> ・全の時間外在校等時間が、月 45 時間以内かつ年間 360 時間以内 	<ul style="list-style-type: none"> ・教員が授業準備に注力できるための事務的業務の改善 <ul style="list-style-type: none"> ・効率化 ・早出勤務の新設、退勤時間の徹底 	<p>5 - ⑯</p> <p>5 - ⑯</p>	A	<ul style="list-style-type: none"> ○全教員(100%)が時間外在校等時間(月 45 時間以内かつ年間 360 時間以内)を遵守 ●各教員の業務の平準化 ◇日常及び衛生委員会での教員の具体的な情報交換・迅速な対応
ICT活用	<ul style="list-style-type: none"> ・全教員が日常的に ICT 機器を活用した授業実践 ・担当教員の校務支援システムの理解促進 	<ul style="list-style-type: none"> ・教員評価に係る授業観察において、ICT 機器活用を必須として設定する。 ・係会における伝達講習 	<p>1 - ①</p> <p>5 - ⑮</p> <p>1 - ①</p> <p>5 - ⑯</p>	B	<ul style="list-style-type: none"> ○全教員(100%)が日常的に ICT 機器を活用して授業実践 ●ICT 担当者による新アプリ等のスピーカーが紹介・研修 ◇わからないことを聞ける教員間の人間関係 ○ICT 係内での伝達講習による校務支援システム担当者の理解促進 ●校務支援システム理解者の増員 ◇校務分掌での校務支援システム担当者の位置づけ

※評価基準： A：十分達成できている B：達成できている C：概ね達成できている D：不十分である E：できていない